

え、この点についてこの討論を希望した。第2点として、心理テストが、差別と選別の道具として使われていないかの注意が必要であることが強調された。人権を守る立場にテストがあるかどうかを考える必要性を強調した発表者の研究は、どこにそのような立場が表われているのかとの質問もあった。教師がテストの結果を知ることが生徒の能力についての先入観を持つことになりはしないかとの指摘があった。テストのもつ差別的な性格についても議論が行われた。

610 Line Completion Test の基礎的研究 — 知能テストとの相関について—

白梅学園短期大学 木津川家久

このテストを思いついたきっかけは何であったか、創造性テストとの関係はどうなのか、空間因子との関係をどう思うか等の質問が行われた。また発表者より①知能のどの側面と関係があるのか、②知能偏差値とLCT得点とのくい違いの原因は何か、についての問いかけがあった。これに対し、神経心理学的研究からの類推としては、空間因子との関連があることが示唆された。補足説明として、LCTと知能検査の組合わせて最も高い相関があり、言語因子との相関は相対的に低いこと、学力検査では国語より数学偏差値との相関が大であったとの報告があった。

611 両信号系の相互作用(その14) — 小学生におけるラテラルリティの特徴と、文理科優位型について—

京都大学 坂野 登

補足説明として、このような神経心理学的研究は、能力の genotype と phenotype の両面より、能力をとらえようとするものであるとの表明が行われた。また本研究は発達的研究の一環であって、小学校から大学生を対象とし、他に知能検査、人格テストなどを併用し研究しているとの報告があった。大学生での結果との関連、その発達の特徴、運動機能と感覚機能のラテラルリティのもつ意味の違いなどについても質問された。また教育指導上から、このテストの持つ意味をどう考えるかの質問に対し、発表者より将来の展望がなされた。

612 Wartegg-Zaichentest における描画能力の検

討 順天堂大学 岩淵忠敬

対象者を、美術および工芸を選択している高校生群と、それ以外の芸術科目を選択している高校生群に限定した理由について質問があった。対照群として一般高校生をとるという論議に対し、発表者は、テストとは全体的な群間の比較を行うのではなく、個人の特徴をとらえるようなものでなくてはならない。従って対照群との比較は、発表者の意図に沿いたいものであるとの回答があった。また発表者より、美術および工芸を選択している生徒の描画能力とその特徴と、Wartegg-Zeichentest とは、その具体像においてよく対応するとの説明があった。

613 集団保育に対する母親の態度 — 沖縄県における調査から—

横浜国立大学 繁多 進 他6名

まず発表者より、この発表が場違いなものであって、自分が領域区分の選択を誤ったためであるとの釈明が行われた。大会事務局としては、発表者の希望部門に機械的に分類するのではなく、適当な配慮を行うことが必要であるように思える。この研究は総合的研究の一環であり、沖縄県と東京都では集団保育に対する母親の態度が異なるという興味ある結果であったので、活発な討論が不可能であったことはおしまれる。

全般的討論

本会場が測定・評価の部門であるからには、何を測定しているのか、何故この研究にこの測定法を使用したのかが徹底的に議論されるべきであったが、不十分であったことは残念である。この部門では当然、能力のとらえ方、評価規準の明確化などが議論されるべきであった。時間の都合で不十分なままに終わった面もあったが、上述の問題点に接近するような討論も行われた。特に知能検査の持つ意味について議論が集中し、一体何が測定されているのか、学業成績との相関の高いものを良しとする傾向が教育現場でみられるが、これに対して検査作製者はどのように答えるべきなのかの問いかけがあった。また各因子の持つ意味について、神経心理学的立場から再解釈しなければならないとの意見表明もあった。(安藤公平・坂野 登)

評 価 (614~619)

座長 柳 井 晴 夫・織 田 揮 準

614 Self-esteem の心理学的研究 (VI)

— 不安と同調性を中心として—

九州大学 ○藤 原 正 博

〃 遠 藤 辰 雄

〃 井 上 祥 治

615 職業興味・志望診断尺度の構成

職業訓練大学校 ○戸田 勝也
Gadjah Mada University Marcham

Darokah

東京学芸大学 藤原 喜悦

〃 河井 芳文

〃 鈴木 真理子

616 適性検査における予測的妥当性の検討

東京大学 肥田野 直

〃 ○柳井 晴夫

東京都立国立高校 金子 泰三

617 価値態度検査に関する研究(その2)

早稲田大学 浅井 邦二

618 カテゴリー尺度の研究

—中性カテゴリーの尺度内位置効果—

三重大学 織田 揮準

619 学級集団における交友関係と偏見について

—Personality-Differentialによる測定—

信州大学 田中 祐次

I 発表と討論の経過

614(藤原ら)は自己に対する評価的な態度としてのevaluationの次元を「個人が自分自身を是認し受容する程度等」と定義し、青年後期におけるSelf-Esteem(以下S.E.と略記)と不安の関係、および外的に不安を喚起するような社会的相互作用のモデルとしての同調性実験の中で、S.E.と同調性の関連を明らかにする実験をJanis, I.L.の「feeling of inadequacy」の23項目を用いて行った。これらに対して田中(信州大)は(1)S.E.概念とS.E.測定項目との間に概念的妥当性が存在すると考えてよいか(2)S.E.概念の定義は操作的定義にすぎないのではないか(3)Aschタイプの同調性実験における同調性の多い者(少ない者)とS.E.項目との関連を調べることによりS.E.概念をよりよく明確化できるのではないか。また織田(三重大)はAschタイプの同調性実験において、同一の調査をすることが被験者の価値観とどのようなかわりをもっているかを検討する必要がある、等の助言があった。

615(戸田ら)は、進路指導における非知的要因としての興味、職業興味の重要性に鑑み、因子分析による8つのカテゴリー尺度に含まれる下位項目の選定、228の職業名に対するクラスターアナリシスの手法の適用により、46の職業クラスターが見出されたことなどを報告した。この報告における尺度構成の方法論的手続きの問題点として柳井(東大)は、(1)職業興味尺度と

して決定された8つのカテゴリーをあらかじめ決定せずに、全項目の因子分析によって尺度を定めることが望ましい。(2)さらに、ここで用いられている因子分析の主因子法の他にグループ主軸法を併用すべきである。などが指摘され、これに対して戸田は、使用した電子計算機の記憶容量が小さい為、全項目の因子分析はできなかったが、文献研究によると、ここにとりあげた8カテゴリーの存在はほぼ認められている、と回答した。

616(柳井ら)は、柳井(1967, 教心研15巻3号)による大学の9つの学科群に対しての性格、興味等の45尺度にもとづく適性検査の予測的妥当性を、高校期に本検査を実施した大学生に郵送法による追跡調査を実施することによって検討したもの。適性検査の妥当性として、予測的妥当性を測定することの問題点として、田中(信州大)は(1)入学すればそこで適応(順応)しようとする力が強く作用するから、妥当性の検証は転学者など学内で方向転換した者について検討する必要がある。浅井(早大)は、(2)予測的妥当性にかわって、概念的妥当性の面から検討すべきではないか。織田(三重大)は(3)分析に用いた被調査者は調査対象の52%であり、偏りがあるのではないか。の3つの質問、助言があり、柳井は(2)に対して、測定論的にみれば概念的妥当性だけを検討するのは片手落ちである。(3)に対しては、郵送法としては回収率52%は満足すべきであろう、と回答した。

617(浅井ら)はSG式価値検査に含まれる項目を因子分析し、本検査の構成領域やその概念的妥当性を検討した。さらに、本検査を中、高、大学生の被験者に実施することによって、価値態度と進路決定に関する問題を明らかにすることを試みた。価値態度と進路の関係では、浅井が討論事項に挙げているように、ある価値態度の保有がある進路を決定するのか、または進路の決定がある価値態度を決定するのかが問題となるが、本研究において、政治経済の学生が、大学1年時に比べて3年時になるとより権力志向型になることが示されたことは注目される。しかし、この事実のみから先に示した後者の仮定が是認されるわけではなく現在の段階では、浅井は、価値態度の保有と進路の決定は、いずれも互いに相互作用をもつと考えるのが妥当であると説明した。この他、柳井(東大)から、強制選択法を用いた場合の項目の因子分析においては、通常の評定尺度の選択肢を用いた場合の因子分析の結果に比べて、一般因子の存在が弱まる、と指摘した。

618(織田)は、中性判断の尺度内位置の変化に伴なうNp(Neutral point)の移動の法則性をみるために、

水平垂直線と水平線による図形を刺激として、13種の
カテゴリー用語の組合せにより41種の順序尺度とし
ての条件を具備した。中性判断をもつ5範ちゅう尺度
により実験を行ない、4つの仮説を検証した。これに対
して田中（信州大）は、(1) この結果は図形などの物
理的刺激だけでなく、社会心理学的態度調査などにも
適用できるものが (2) この方法によると刺激への反
応がカテゴリー用語に用いられる言葉によって制限を
うけるので、反応を無限直線上に自由に記入させるア
ナログ式評定にする方が有効ではないか、と質問した
が、織田は(2)に対して、アナログ式評定においても、
心理的メカニズムとしては言葉を用いていると反論し
た。また柳井（東大）も、アナログ式評定では、たと
え個人の反応を標準得点になおしたとしても、個人の
反応の絶対差の情報が消失する欠陥があることを指摘
した。

619（田中）は、「偏見」をある個人が他の個人に対
してもっている認知と、集団の成員たちがその個人に
対してもっている平均的認知との間に存在する差異で
あると操作的に定義した。そして、ソシオメトリック
テストによって、小学校のあるクラスから人気者と謙
われ者を選び、田中の作成したP-D60スケールを実施
し、先の定義のもとで両グループにおける偏見の強さ
を測定した。この結果、人気者には情緒性、誠実性、
生活態度、嫌われた者には誠実性、情緒性、対人態度
に偏見があり、安定性、活動性には偏見が生じにくい
ことが明らかにされた。

偏見の算出法として平均的認知のずれをあげている

ことに対して、柳井（東大）は、同一の平均でも分散
の異なることがあるから、分散の情報を包めた指標を
作成する必要性のあることを指摘した。

II ま と め

614～619の6つの発表のうち、615、616、617はい
ずれも進路指導に関連したもので、これまでの知的要因
重視の進路指導に対して、性格、興味、職業興味、価
値観などの非知的要因の重要性を強調している点が特
徴的である。このような因子を主体とした適性検査の
必要性については、浅井（早大）の述べたように広い
意味ではあった方がよいが、現在の入試の状況では、
適性にあった志望がそのままでは生かされえないこと
が大きな問題点といえよう。さらに、適性検査に含ま
れる興味、性格、価値検査における妥当性の検証とし
ては、予測的妥当性だけでなく、概念的妥当性の検証
もすべきであるという点は、広く心理検査の尺度構成
に共通するものであろう。しかし、実際には予測的妥当
性も十分検証されていない心理検査が氾濫している今
日、615、616、617の発表は心理検査の作成という点
でも分離の多いものである。この他、織田（三重大）の
発表は、尺度構成における基礎的研究で、上記の質問
紙による心理検査の尺度構成に対しても分離の多いも
のである。測定・評価に関するこのような基礎研究は
最近では軽視されがちであるが、本研究からみて、因
子分析にかける以前に相関係数のとり方を細かく吟味
するような研究がもっとなされて然るべきといえよ
う。
（柳井晴夫・織田揮準）

評 価 (620～624)

座長 小 嶋 秀 夫・丸 山 和 夫
620 幼児用語彙検査作成の試み

北海道大学 ○田 島 信 元

国立教育研究所 永 野 重 史

621 KEL 就学児標準知能検査の構成と標準化 (1)

(1)

近畿大学幼児教育研究所 ○辻 西 昭 二

近畿大学 小 田 信 夫

622 認知機能の個人差について概念化と測定

名古屋大学 小 嶋 秀 夫

623 WISC の分析的研究 V

—WISC による 20 年間の知能の変化—

東京成徳短期大学 ○中 田 カヨ子

小田原女子短期大学 児 玉 省

624 ITPA と VADS テストについて

熊本商科大学・熊本短期大学 丸 山 和 夫

I 発表と討論の経過

620 幼児用語彙検査作成の試み

北海道大学 ○田 島 信 元

国立教育研究所 永 野 重 史

アメリカでよく使用されている PPVT (Peabody
Picture Vocabulary Test) の日本語版が、対象を幼児
にしぼって試作された。第1試作版は3・4才児合計48